

第25回日本福祉文化学会全国大会 大分大会を終えて

大会実行委員長（社会福祉法人 泰生会理事長） 雨宮洋子



開会セレモニーの様子

第25回日本福祉文化学会大分大会は、10月4日、5日の二日間別府市のビーコンプラザを会場に「認知症を受けとめる」を福祉と文化の見地からテーマとして開催された。台風の恐怖にさらされながらの学会開催となったが250名の参加者が集い有意義な大会を催す事ができた事に参加者はじめ今回の大会に協力頂いた皆様に感謝でいっぱいである。

今回は、認知症を受けとめ、認知症の人が尊厳のある一人の人として生きることを支えるために私たちがすべきことは何かをあらためて皆様とともに考えてみたいとの思いから私が生涯のテーマとして取り組んでいる「認知症」に焦点をあて大会に臨んだ。

私が施設を開設した昭和61年には認知症の問題は一部の人の病気であり誰もがかかりうる病気ではないとされてきた。それから30年近く経った今日では長寿社会になればなるほど自分に降りかかってくる問題となった。これからの認知症ケアは、より専門性の高い医



特別講演講師の南 慧昭氏

療、ケアの実践、研究が期待されている。しかし、その一方で、認知症の人への虐待や権利侵害が繰り返されるなど、看過できない課題が山積しているのも事実である。

二日間を通して特別講演、基調講演、5か所での交流分科会、4か所での研究発表、委員会企画、鼎談に参加し認知症になっても「豊かに」「楽しく」「有意義」に利用者中心に最後のステージを迎えることができることへの前向きな方向性が見えてきたように思える学会であった。

はるばる九州の地に足を運んで頂いた多くの方々に感謝でいっぱいである。この学会で得た多くのつぼみが各々のこれからの研究に、実践において花開くことを願って学会を終えた。

●基調講演「文化の眼鏡」で福祉を視る

研究委員会「よもやませみ」での2年にわたる論議を踏まえて、蘭田碩哉顧問が「福祉と文化が出会う時」文化の眼鏡で福祉を視る」と題して今後の研究の方向について問題提起を行った。福祉文化研究は「福祉文化」の研究ではなくて、福祉の「文化研究」であるべきだととして、福祉を見直すために4種類の「文化の眼鏡」(視点)を紹介した。それらは①価値志向の眼鏡、②福祉領域の特色が見える眼鏡、③「遊び」やアートを見つけ出す眼鏡、④福祉実践の背後に働いている力を見つめる眼鏡であり、これらを組み合わせて問題や課題を発見し、解決策やあるべき方向を探っていくこと、それが福祉文化研究のあるべき姿だと力説された。

特別講演

報告者…
河東田博

日本福祉文化学会に参加すると元気がなくなって帰ることができた。そのことを証明してくれたのが、今回の大分大会だったように思う。そして、具体的にそのことを教えてくれたのが、特別講演「心の健康―仏心は歌心」であり、講師の勝光寺南慧昭住職であった。南住職は、弟「南こうせつ」よりも歌がうまいと自認しているそうである。確かに声量豊かであった。「サラリーマンを定年退職してから曹洞宗の修行を積んだ」異色の住職でもあった。「一人に対する思いやりや有り難うの一言を言える強さを持つ」と歌で呼びかけ「悩める人達の心にはっとする時空を与えよう」と活動をしている住職でもあった。余計な説明は省き特別講演の感想を一言で記すと、「楽しかった」あるいは「温かい気持ちになった」ということになるだろう。自ら作詞・作曲した歌は情感たつぷりであり、歌と歌との合間の解説を聴いて歌の内容がさらに実感できた。参加者と共に歌うことによって、会場に一体感が生まれた。日本福祉文化学会、いや

大分大会ならばこそ心豊かになれた特別講演だった。

交流分科会

●第1交流会：「音楽」 認知症と楽しむ音楽

報告者…志賀俊紀



音楽の効能は無敵大∞

第1交流会分科会はギターレレ（小さくて素敵なギター）の奏でる無伴奏の演奏から始まった。講師の山下一郎さんは幼い時からギターに親しみそれが今日に至ったという経歴をお持ちの人であった。しかもアドリブ入りの「認知症と楽しむ音楽」の講座は、老人施設におけるコミュニケーションの導入の部分に、一捻りの工夫があり重要なポイントを示された。音楽を媒体とした「療法」は、自然と心を開き、心を通わせる作用に大きく役立つことを示唆すると共に、音楽療法の有用性は老若男女、年齢、施設種別を問わず実

践が試みられ体系化され福祉施設においても導入されている。そして「新たな福祉」のキーワードとして、しかも認知症の人の余命の時間を命の尊厳に配慮しながら、福祉文化的視点に立脚した山下さんの活動は、即戦力のある施設処遇技術の向上に寄与するものであると改めてその実践に期待をしたい。

●第2交流分科会：「回想法」

「ミツケルアート」

報告者…五十嵐真一

ミツケルアートは、「いつでもどこでも、誰でも回想療法ができるツールで、クイズ性を持たせた昔懐かしい絵画を使うことで、介護職員や高齢者同士の会話を弾ませ、高齢者の真のニーズを引き出していくコミュニケーションツールである。」（ミツケルアートHPから）

具体的には、誰もが知っている昔のお茶の間や井戸端会議、教室の風景など日本の生活の伝統的な風習を題材とした絵画（アート）です。見た人は、一緒に見ている人とこの絵について自分の心の引き出しの奥にある記憶を引っ張り出し、思わずそれについて語りだしたくなります。また、これらの絵の中に色々な動物や道具類の絵を隠し絵的にちりばめること

●第3交流分科会：「文化」 ふるしき文化

報告者…福山正和



ふるしきの多様な活用

（ミツケルクイズ）で、これらの会話の要素となるものが色々な人の様々な興味関心（記憶）に呼びかけると共に「動物は何匹いますか？」などのクイズ形式にすることによって、見た人の注意や観察力、見当識などをより刺激する工夫を凝らしているものとなっています。また、世代の違う介護職員と高齢者との会話を助けるなど介護現場のコミュニケーションを円滑にして、参加者の脳を活性化し、認知症の行動・心理障害（BPSD）を抑制する効果が実証されている様子も報告されました。ミツケルアートの「ミツケル」は、「見つける」の意であり、高齢者が失いかけている記憶や希望を見つけていくものとなっている事がわかりました。（当日配布された資料からの引用有）

●第4交流分科会：「美」

報告者…矢野実千代



実演をもとに美を考える

フラダンスでユマニチュードという患者さんと向かい合う接し方が認知症や病気の治療に効果を出している。日本はおもてなしの精神を道徳として当たり前することに戻すことがイノベーションになる。

社会の在り方までも巻き込み、偶然の幸運に出会うことを気づきとして、捉えアクションを起こす時である。観念的にサービスを義務的に行って「する側もされる側」もマナーリ化して飲みを失っている。いつも、今ここにベストを尽くし、周囲への自然な愛(和)のもとに、自分らしい自己を生きぬくことが人間として生きる意味を全うする。脳は新しいことが大好きである。新しいことに会うとドーパミンが出てくる。新しい自分の顔（化粧療法）に出会うことで希望をもつて生きることが出来る。

まずは医療福祉に携わる女性自身に、自分のために自らが心地よいこと、自分を大切にすること、改めて使命に立ち返る事ができる。●第5交流分科会：「回想法」
「地域文化と福祉の創造」
報告者…多田千尋

連続企画の6回目を迎え、九州地区より3実践が寄せられた。1つ目は、おもちゃを生活道具として活用し、子どもの生きる力、考える力、人と関わる力を育む支援を通して、地域で子どもの成長を見守り、文化を継承する小児看護学の専門家による活動。2つ目は、リハビリに作品展参加や大会出場などの具体的な目標を設け、社会参加することによつ

委員会企画

報告者…
マーレー寛子

「研究と実践の融合」

て、生きがいを見出し、人生を再創造する作業療法士による活動。最後に、「地域の誰もが立ち寄れる施設」を目指し、双方向の地域交流を展開する社会福祉法人による幼老統合ケア、認知症支援などを通じた福祉文化活動。いずれも、自らが地域へ働きかけ、人と触れ合うことによって、新たな文化活動を目指す優れた実践に、多くの賛同の声が寄せられた。

当学会の特徴の一つである研究と実践の融合を推進していくために毎学会大会において開催してきている企画の一つとして今年度は、「認知症と福祉文化」の大会テーマのもと大分大学の三重野英子さんと別府市旭地域包括支援センター看護師の山本幸子さんがそれぞれの研究者と実践者の視点から議論された。三重野さんは、「湯布院における認知症コーディネー



熱心な議論が交わられています

シンポジウム

報告者…
佐藤嗣道

「我がままに今を生きる」 新たな福祉実践の方向

認知症を文化の眼鏡で見ると、どのように見えるのか。馬場清さん（研究委員会担当理事）から、よもやまゼミで企画したシンポジウムのねらいが紹介され、園田碩哉さん（日本福祉文化学会顧問）の温かくユーモアを交えた進行で鼎談が行われた。

お話しいただいたのは、雨宮洋子さん（社会福祉法人泰生会理事）と藤川幸之助さん（詩人）。雨宮さんは、28年前に認知症の方の

（ミツケルクイズ）で、これらの会話の要素となるものが色々な人の様々な興味関心（記憶）に呼びかけると共に「動物は何匹いますか？」などのクイズ形式にすることによって、見た人の注意や観察力、見当識などをより刺激する工夫を凝らしているものとなっています。また、世代の違う介護職員と高齢者との会話を助けるなど介護現場のコミュニケーションを円滑にして、参加者の脳を活性化し、認知症の行動・心理障害（BPSD）を抑制する効果が実証されている様子も報告されました。ミツケルアートの「ミツケル」は、「見つける」の意であり、高齢者が失いかけている記憶や希望を見つけていくものとなっている事がわかりました。（当日配布された資料からの引用有）



温かい雰囲気の中のシンポジウム

実践学会賞

報告者…
石田易司

今回の大会での実践学会賞は何



と顧問の園田碩哉さんに受賞していただいた。理論家として鳴らしている園田さんだが、実は偉大な実践者でもあったのだ。

「子どもの遊びと発達」が彼の継続的なテーマで、ご自分で幼児園を運営されたり、NPO法人を作つて遊びを展開されたり。そのさまざまな遊びの活動に対して、実践学会賞が贈られた。

●温かい懇親会

懇親会は地元色のにじみ出たい会だった。トピックは何と言っても地元「大分宮川内」地域の人々たちによる「ひよっこ同好会」。そのお面の表情と動作の面白さが私たちを虜にした。それぞれの町には文化を伝える素晴らしい人々がおられることを、おいしいお酒や食事とともに、まさに実感した夜だった。

会員情報

●2014年10月31日までに、ご入会された方のお名前と所属ブロックをお知らせ致します。（敬称略）
橋口論（中部東海）、田島睦子（九州）

●計報

学会の役員でもご活躍された大島道子さんが8月にお亡くなりになりました。心よりお悔やみ申し上げます。

「学会員から福祉文化のルーツを考える視点でお届けします。」

社会福祉領域に特徴的な

「文化」とは

藺田碩哉（日本福祉文化学会顧問）

「文化」という言葉を「ある人間集団の生活様式や考え方の特徴を客観的に捉える」用語として見たとき、社会福祉領域の文化的特徴は何でしょうか。こうした意味での文化は私たちの意識の深い所に根づいているので、その中にいる人にはかえって気づきにくいものなのです。日本人固有の文化的なクセ、すなわち日本文化の諸特徴は、外国人にはよく見えても私たちにあまりに当たり前で意識に上りにくいというのと同じです。例えば私たちは家に帰って玄関を入れば当然に靴を脱いで床に上がりますが、そうする国ばかりではないことは、ちよつと外国に行ってみればすぐわかります。外国から来た人が靴のまま上がり込んで来てびつくり、という経験を持つ人も少なくないでしょう。

自分自身の文化を客観的に見ようと思うなら、日ごろ親しんでいるさまざまな営みから無理にでも身を離し、それを突き放して冷厳に見つめ直してみる必要があります。

す。福祉領域の文化を考えるためにも現状をカッコに入れて突き放して眺め、常識から自由になって全てを問い直す態度が求められます（学問というのはいささか力技によつてはじめて成立するものだと思います）。

福祉領域を深く染め上げている代表的な「福祉文化」として、私は「禁欲主義」を真っ先に上げたいと思います。ここで禁欲主義というのは「快樂主義」に対立する言葉で、人間の欲望を押さえて、清く、正しく、つつましく生きること、あるいはそういう生き方こそ理想だと考えることです。福祉現場を訪ねてみれば、そのことは一目瞭然で、老人ホームでも障害者の施設でも、毎日の生活はできるだけ簡素に、また個人的な欲求や主張はなるべく抑えて、波風を立てないように穏やかに過ごすことが暗に求められているのが分かります。一般の社会では、こうした禁欲的な倫理はとうの昔に放棄されて（第2次大戦前までは、少

なくとも建前としては禁欲的に「清く、正しく」生きることが求められました）、誰もが自然な欲望を抑え込んだりせずに、心の赴くままに、我がままに、自由奔放に生きることが認められています。その人らしいという意味である「わがまま」が福祉の世界では自分勝手な問題行動ということになりがちです。そこに福祉文化の大きな特色を見出すことができるのではないのでしょうか。

その底流にあるのは、近代的な福祉制度の始まりとなったイギリスの新救貧法（1834年）の劣等処遇原則だと言えるでしょう。すべての貧民を法律で救済するという画期的な施策は、だが一つの条件が付いていました。救済の水準は、最下層の労働者の生活水準よりも低く押さえること、という原則です。そうしないと真面目な勤労者が働かなくなると当時では考えられたのです。それから時代を経てノーマライゼーションが呼号されるようになって、日本の福祉文化はまだ、福祉サービス受給者はつつましく生きよという文化を手放すことができていないように思われます。

（つづきは平成27年2月発行・通信76号に掲載の予定です）

2014年度 日本福祉文化学会総会報告

新体制で何をやるのか

（報告者：馬場清）

大分大会2日目は「総会」から始まった。例年大会時に行われる総会では、前年度事業報告、決算報告、そして来年度の事業計画、予算案の検討などが行われる。それに加えて今回は、来年4月からの新役員体制の承認が行われた。

会長には不肖私が、副会長には岡村ヒロ子、永山誠の両氏が就任することとなった。日本福祉文化学会の大きな転換期にあたる今、正直会長を引き受けることは、私にはあまりにも重い決断ではあったが、他の役員の方々とも協力しながら、何とか3年間を乗り切っていければと思っている。

総会では、来年度の活動の大きな方向性として「事業方針」を説明し、了解を得た。項目としては、以下の7つ。①新役員体制への速やかな移行②会員の満足度の向上と会員増及び会員の多様化に向けての取組③ブロック活動の活性化④全国大会の活性化⑤福祉文化現場セミナーの活性化⑥委員会活動の活性化⑦福祉文化学会らしい企画の実施と社会への発信

どれも当たり前のことを言っているに過ぎないが、河東田会長の下で将来構想委員会から出された

答申に基づき、今ある仕組みをさらに盛り上げ、一方で新しい試みもどんどんやっていきたいと思っている。

とはいえ、「言うは易し、行うは難し」。かなりハードルは高いが、役員をはじめとして、会員の皆さんの協力を得ながら、何とかこの3年間で、「学会に入って良かった」と思える会員の数を増やしていければと思っている。

関東ブロック主催 クロスブロックセミナー第2回

（報告者：梅津迪子）

「福祉現場で求められる職員の質とは何か―施設長・現場職員・利用者家族の立場から―」
期 日：8月2日（土）
参加者：24名

当日は酷暑の上、JR事故のため長時間の運転停止や遅滞が生じ、各路線に影響を及ぼす結果となったがご遠方（長野県佐久市や川崎市、横浜市、鶴ヶ島市、飯能市など）からのご参加をいただき、予定の閉会時間を超えて有意義な意見交流会となった。

※詳細はHPにて確認ください。

■20周年記念の全国大会（東京大会）で、ご講演いただきましたオペラ歌手の中島啓江様が11/23に逝去されました。ご生前のご功績を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。